

# 大学生のお金に関連する行動の分類および類型化

渡辺 伸子

東北公益文科大学総合研究論集第34号 抜刷

2018年7月30日発行

## 大学生のお金に関連する行動の分類および類型化

渡辺 伸子

### **Classifying monetary behaviors and distinguishing clusters typical for university students**

Nobuko WATANABE

#### **summary**

Monetary behaviors that affect interpersonal relationships of university students were classified and clusters of typical student were identified. In Study 1, participants ( $N=10$ ) were interviewed regarding their monetary behaviors and categorized. In Study 2, participants ( $N=193$ ) responded to questionnaires about their monetary behaviors. Cluster analysis of the responses identified four groups: “Active monetary exchange”, “inactive monetary exchange”, “general monetary inactivity”, and “approach and lack of monetary moderation”. Results indicated that most participants belonged to the last group ( $n=74$ ). This is suggestive of the difficulty that university students have in developing balanced monetary behaviors as university freshmen, which could be the result of facing many new experiences related to money. Finally, the need for research on interpersonal processes related to money is discussed.

**Keywords** : Monetary behaviors, money beliefs, university students

---

キーワード：お金に関連する行動, お金に対する信念, 大学生

## 問 題

お金には、交換の道具としての機能（一般的交換手段）、価値の高さを測り表す機能（価値尺度手段）、価値を保存する機能（価値貯蔵手段）があるとされている（片平，2003）。そのようなお金という道具を用いて、私たちは日々、商品やサービス、労働力などを売り買いしている。そのような営みは経済活動と呼ばれる。しかしながら、お金という道具は経済活動だけでなく、対人関係にも影響力を持つと考えられる。竹尾・高橋・山本・サトウ・片・呉（2009）では、子どもの発達によって、お金の使い方やお金についての価値観が変化することが明らかにされている。特に、発達に伴い、友人と共有できるトピックを増やすための購買行動が増えることが明らかにされており、お金の使用が経済活動のみにとどまらないことが示唆された。

大学生のお金についての経験に目を向けると、大学生活では高校時代と異なり、お金の面での自由度が増大することが明らかになっている。たとえば、高校生のアルバイトの経験率は28.0%（国立青少年教育振興機構，2016）だが、大学生では66.9%がアルバイトを行っており（国立教育政策研究所，2016）、収入という側面におけるお金に関連した経験の拡大が伺える。また、高校生の1ヶ月のおこづかい額は5,000円程度（最頻値5,000円，平均値5,114円，中央値5,000円：金融広報中央委員会，2016）であるが、大学生の「娯楽・し好費」は国立大学の学生で1ヶ月9,950円（年額の119,400円を12ヶ月で除した：日本学生支援機構，2016）であり、消費の面でもお金に関連した経験が拡大していることが推察される。

収入や消費の側面での経験が増大することを受けて、お金に関する情報が対人認知にも用いられるようになる。大学生を対象に嫌われる人物の特徴を自由記述で収集した研究では、恋愛経験がない男性の調査協力者が、「男性に嫌われる男性の特徴」として「お金にうるさい」を挙げていた（豊田，1998）。これをもとに、大学生を対象に嫌われる人物の特徴について評定させたところ、調査協力者の性別に関係なく、「女性から嫌われる男性の特徴」および「男性から嫌われる女性の特徴」として、「お金にうるさい」が得点の理論的中央値3.5よりもやや高い値を示していた（豊田，1999）。つまり、お金にうるさいことは、異性に好かれる特徴ではないとみなされていることが明らかになった。

この調査では、調査協力者の性別による差は見られなかったため、お金にうるさいことは、男女ともに、異性にやや嫌われる特徴として認識されていると考えられる。一方で、「同性から嫌われる特徴」では、調査協力者の性別による得点の差が見られた。「男性から嫌われる男性の特徴」の場合には、「お金にうるさい」は女性の調査協力者の方が男性の調査協力者より得点が高かった。「女性から嫌われる女性の特徴」の場合には、男性の調査協力者の方が女性の調査協力者より得点が高かった。男女ともに、異性の対人認知について、「お金にうるさい」ことは嫌われる特徴であると過大に評価していることが伺える。豊田（1998）および豊田（1999）の主要な結果は、性格的な要因が嫌われる特徴として強く認識されているという内容であったが、その中にお金に関連する行動傾向が含まれていたことから、お金は対人関係において影響力を持つとみなされていることが示されたといえる。

また、お金に関する情報から、羞恥感情が引き起こされるという報告もある。大学生を対象として、羞恥感情を引き起こす状況について調査した成田・寺崎・新浜（1990）では、「金銭」という状況が抽出されている。「金銭」は、「ぶざまな行為」や「無能力」などと同一のカテゴリーに分類されていた。このカテゴリーは、自分が行為者として何か失敗をして羞恥感情を抱くという状況の構造を有しており、金銭面で失敗することで恥の気持ちが生じることが大学生に意識されていることが明らかになった。羞恥心は神経症傾向と正の関連を示す（有光，2001）ことから、お金に関連する失敗が精神的健康に否定的な影響を与える可能性を示すものである。

さらに、大学生では、認知の面だけではなく実際の対人関係の面でもお金が意識されるようになる。大学生を対象に恋愛関係の影響について尋ねた高坂（2009）では、因子分析の結果、交際費の負担などの項目から構成される「経済的負担」因子が見いだされている。恋愛関係にある者は、恋愛関係にない者と比べて、「経済的負担」因子の得点が高かった。一方で、性差は見られず、関係関与度との関連も見られなかった。つまり、恋愛関係にある大学生は、性別や関係への関与度によらず、何らかの経済的負担を感じているといえる。以上のように、大学生はお金の面での経験の拡大が見られ、それにしなだつて対人認知や対人行動においてもお金の影響力が増していくといえるだろう。

ところで、一般成人に目を向けると、様々な研究が対人関係におけるお金の影響力を明らかにしている。お金を刺激としたプライミングの実験研究をレビューしたVohs (2015) は、お金をプライミングすると、向社会性や養護性、あたたかさなど、対人関係で好ましいとされる傾向が減少することを報告している。レビューされた実験での刺激の提示方法は、実物のお金に触る作業の他、画像の提示、お金についての文章の作成など、多様であった。以上から、お金を見たり、お金について考えたりすることによって、他者への働きかけが変化することが示唆される。

加えて、夫婦に対し、家庭でのお金の話題とお金以外の話題について尋ねた Papp, Cummings, & Goeke-Morey(2009) では、対人関係におけるお金の話題の特徴が明らかにされている。第一に、お金の話題は家庭において、それほど頻繁に議論されていなかった。具体的には、子ども、家庭の雑用、コミュニケーションスタイル、レジャーが、お金の話題よりも頻繁に議論されていた。第二に、お金の話題はそれ以外の話題と比較して、短期的にも長期的にも重要と考えられており、怒りや抑うつなどの感情表出が強く、繰り返し議論される傾向にあった。以上の2点の特徴を考慮すると、お金の話題は、あまり頻繁に議論されるわけではないにも関わらず、繰り返し議論され、ネガティブな感情表出が多いためにストレスフルなものであると推察される。日本でも、調停による離婚の際の動機を見ると、申立人が妻の場合、複数回答の12の選択肢のうち、「生活費を渡さない」が2番目に選択率が高く（最高裁判所事務総局、2017）、実際の夫婦関係においてもお金は関係を悪化させる原因になっている。Papp, Cummings, & Goeke-Morey(2009) や最高裁判所事務総局（2017）は夫婦を対象としたものであるが、夫婦ほど親密な関係ではなくとも、お金の話題は対人関係に何らかの影響を与えていると考えることが可能であろう。

また、心理臨床場面からの指摘もある。妙木（1999）は、心理臨床という特殊な場面での対人関係が、クライアントからカウンセラーへの支払いというお金を基盤にして成り立っていることを指摘している。また、妙木（2000）は、カウンセリング場面で語られる人と人との間のお金のやりとりのエピソードが非常に重要であることを、事例を交えて報告している。これらのことから、対人関係の中でやりとりされるお金が、関係を促進したり、一方の心理的健康を

害するなど、対人関係の維持に対し影響力を持つことが示唆される。

以上のように、実験研究、夫婦を対象とした調査、心理臨床場面からの報告といった多様な方法・領域において、対人関係におけるお金の影響力が報告されている。これまで、お金については、「お金に対する態度」(money attitudes; Yamauchi & Templer, 1982) という観点から研究が行われてきた。お金に対する態度は、お金に対する認知、行動、感情の個人差と概括されている(渡辺・佐藤, 2010)。その中でも、特に認知に焦点を当てたものは「お金に対する信念」と呼ばれ、尺度化が行われている(渡辺, 2014a)。お金に対する態度の研究領域では、職務中の非倫理的行為(Tang & Chiu, 2003)、就業場面での援助行動(Tang, Sutarso, Davis, Dolinski, Ibrahim, & Wagner, 2008)、強迫的な買い物行動(Hanley & Wilhelm, 1992)、募金行動(渡辺, 2014b)などの行動が扱われてきた。しかしながら、これらは他者に働きかけるためにお金を使用するような場面を想定したわけではないため、対人関係におけるお金の影響力を窺い知ることは難しい。

そこで、本研究では、大学生を対象として、対人関係に影響を与えるお金に関連する行動を分類し、類型化することを目的として調査を行う。本研究における「お金に関連する行動」の定義は、「具体的あるいは抽象的にお金を操作する、他者から観察可能な諸行動」とする。調査1では、お金に関連する行動として大学生にどのような行動が意識されているのか明らかにするため、面接調査を行う。調査2では、行動の類型化を行うため、調査1に基づいて項目を作成し質問紙調査を行う。

## 調査1 大学生のお金に関連する行動の分類

### 目的

大学生に意識されているお金に関連する行動を分類することを目的とした。

### 方法

**調査協力者** 関東の国立大学の心理学関連の授業および教職課程の授業において協力者を募集し、協力を申し出てきた学生10名(男性5名、女性5名)が面接調査に参加した。大学生9名、科目等履修生1名であった。平均年齢は、20.70歳( $SD=2.00$ )であった。

**調査時期** 2010年9月に実施した。

**調査手続き** 半構造化面接を行った。「お金に対して普段思っていることについて思いつくことを話してください」と教示したのち、次の3点について尋ね、回答を求めた。第1は、「あなたが、友人と過ごすときにすることのある、お金に関する行動（会話も含む）について」であった。第2は、「友人と過ごしているときに、友人がしているのを見たことがある、お金に関する行動（会話も含む）について」であった。第3は「その他、友人関係の中で、気になるお金に関する行動について」であった。また、回答をより精緻なものにするため、必要に応じ、回答に対して追加の質問を行った。面接時間は約30分から約60分であった。

### **結果と考察**

面接を行った後、面接で得られた記述を行動またはエピソード単位に分割し、カードに印刷した。カードを用いて、筆者を含む大学院生3名が分類を行った。行動およびエピソード単位に分割された記述の総数は192であった。

面接で得られた記述の分類の結果をTable 1に示した。上位カテゴリーは、お金を貸したり借りたりする「貸し借りをする」カテゴリー、衝動買いや浪費などの「お金のことを統制できていない行動をとる（以下、「統制できていない行動をとる」と呼ぶ）」カテゴリー、節約や家計簿をつけるなどの「お金のことを統制している行動をとる（以下、「統制している行動をとる」と呼ぶ）」カテゴリー、おごったりおごられたりする「不平等なお金のつかい方をする」カテゴリー、支払いを割勘にする「平等なお金のつかい方をする」カテゴリー、アルバイトをする「収入を得る」カテゴリー、募金やお賽銭などの「寄付的な行動をとる」カテゴリー、一緒にいる他者に金銭的な水準を合わせる「人に合わせる」カテゴリー、道で財布やお金などを拾う「お金を拾う」カテゴリー、自分と友だちのお金の使い方が似ているという「友だちとお金のつかい方が似ている」カテゴリー、バイト代や貯金などの話をする「お金の話をする」カテゴリー、交際費に使う「交際費」カテゴリー、一人で買い物に行く「買い物に一人で行く」カテゴリー、「その他」の14カテゴリーであった。14カテゴリーのうち、「その他」と、行動とは考えにくい「友だちとお金のつかい方が似ている」および「交際費」、行動のレパートリーが狭く複数の項目による測定が

Table 1 面接で得られた記述の分類結果

上位カテゴリー	下位カテゴリー	例	数
貸し借りをする	借りる	人からお金を借りる。	13
	貸す	財布を忘れた友だちにお金を貸した。	17
	返す	お金を借りたら、返す準備をすぐにする。	3
	貸し借り	ごはん代を、貸したり借りたりする。	8
お金のことを統制できていない行動をとる	衝動買い	ストレスが溜まると、衝動買いをする。	10
	ギャンブルをする	株やギャンブル、UFOキャッチャーをする。	6
	お金が貯まらない	お金を貯めようと思うが、貯まらない。	1
	ブランド物を買う	ブランド物を買う。	4
	浪費	お金がないのにお金をつかってしまう。	16
お金のことを統制している行動をとる	節約行動	無駄遣いをしないようにしている。	27
	買い物に慎重	買い物が苦手だ。	3
	家計簿をつける	家計簿をつけている。	5
不平等なお金のつかい方をする	おごる	飲み会で、後輩におごった。	10
	おごられる	先輩におごってもらった。	6
	たかる(おごってくれるよう頼む)	後輩に「おごって」と言われた。	4
	平等なお金のつかい方をする	割勘で払う	飲み会の時に、割勘で支払った。
収入を得る	アルバイトをする	アルバイトをして、生活費などにあてる。	13
寄付的な行動をとる	募金をする	コンビニで募金をする。	4
	お賽銭をあげる	初詣に行って、お賽銭をあげる。	2
人に合わせる	人に合わせる	飲食店で、食べたいものを我慢して、一緒に行った友だちと同じくらいの値段のものを頼む。	5
お金を拾う	お金を拾う	友だちといるときに、財布を拾った。	5
友だちとお金のつかい方が似ている	友だちとお金のつかい方が似ている	自分とお金のつかい方が似ている友だちと買い物に行くとき楽しい。	4
お金の話をする	お金の話をする	バイト代や貯金についての話をする。	4
交際費	交際費に使う	交際費は大切だと思う。	3
買い物に一人で行く	買い物に一人で行く	買い物は、一人で行く。	2
その他	その他		4
			合計 192

難しいと考えられた「買い物に一人で行く」の4カテゴリーを除いた10カテゴリーを調査2で使用する事とした。

## 調査2 大学生のお金に関連する行動の典型例の導出

### 目的

大学生のお金に関連する行動の類型化を行うことを目的とした。

### 方法

**調査協力者** 国立大学1校および私立大学2校、合計3校の大学生199名が調査に協力した。男性が64名(32.2%)、女性が129名(64.8%)、不明が6名(3.0%)であった。平均年齢は19.54歳(SD=2.09歳)であった。

**調査時期** 調査は、2010年10月から11月にかけて行われた。

**調査内容** ①お金に対する信念：大学生用お金に対する信念尺度(渡辺、



2014a) を使用した。「ネガティブな影響源」, 「ポジティブな影響源」, 「労働の対価」, 「獲得困難性」, 「重要性」の5下位尺度, 全30項目であった。「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で回答を求めた。②お金に関連する行動項目: 調査1によって得られた「貸し借りをする」, 「統制できていない行動をとる」, 「統制している行動をとる」, 「不平等なお金のつかい方をする」, 「平等なお金のつかい方をする」, 「収入を得る」, 「寄付的な行動をとる」, 「人に合わせる」, 「お金を拾う」, 「お金の話をする」の10カテゴリーに対応するように項目の作成を行った。なお, 項目の作成時に, 「貸し借り」については「貸す」と「借りる」として別の行動として分離した方が概念として明確であると考え, 2つに分けた。よって, 項目の作成時には11のカテゴリーを想定し, 各3項目, 合計33項目を作成した。項目の作成は筆者が行ったが, 項目がカテゴリーに合致しているか等について, 教員1名および大学院生1名がチェックを行った。「あなたは, 次のような行動を, 普段の生活の中でどの程度していますか。」と教示し, 「よくする(4)」, 「ときどきする(3)」, 「ほとんどしない(2)」, 「まったくしない(1)」の4件法で回答を求めた。③デモグラフィックな変数: 性別と年齢を尋ねた。

## 結果と考察

**お金に関連する行動項目の得点化** 初めに, 当初想定したカテゴリーに対応して主成分分析を行った (Table 2)。カテゴリーごとに $\alpha$ 係数を算出し,  $\alpha$ が.60に満たなかったものに関しては, 項目の削除を行い,  $\alpha$ を高める措置を行った。項目削除前の $\alpha$ 係数をTable 2に示し, 最終的に採用した項目については主成分負荷量を点線で囲った。採用した項目から算出した $\alpha$ 係数をTable 3に示した。項目の削除を行っても $\alpha$ が.60を超えなかった「不平等なお金のつかい方をする」カテゴリーに関しては, 以降の分析には含めないこととし, お金に関連する行動は10カテゴリーとなった。

**基本統計量** 大学生用お金に対する信念尺度およびお金に関連する行動項目の基本統計量および $\alpha$ 係数をTable 3に示した。下位尺度やカテゴリーごとに素点を単純加算し, 項目数で除したものを得点として用いた。

**クラスター分析による群の抽出** クラスター分析 (Ward法-平方ユークリッド距離) を用いて, 欠損値のない198名をクラスターに分類した。投入変数は,

Table 2 お金に関連する行動項目の主成分分析の結果

<b>貸す (α=.77)</b>			
k14	お金が足りなくて困っている友だちに対してお金を貸す。	.84	
k3	友だちが財布を忘れたというので、お金を貸す。	.82	
k25	小銭がなくて困っている友だちに、小銭を貸す。	.82	
		68.18%	
<b>借りる (α=.77)</b>			
k12	出かけた先で、財布の中にお金が入っておらず、一緒にいた友だちにお金を借りる。	.87	
k1	財布を忘れてしまい、その場にいる友だちにお金を借りる。	.86	
k23	小銭がないときに、友だちからお金を借りる。	.75	
		68.89%	
<b>統制できていない行動をとる (α=.63)</b>			
k13	買い物に行くとき、買うおと思っていなかったものまで買ってしまふ。	.83	
k2	服などを衝動買いする。	.78	
k24	お金をためようと思うが、失敗する。	.67	
		57.92%	
<b>統制している行動をとる (α=.52)</b>			
k15	何かを買うときは、買う前によく考える。	.79	
k4	無駄遣いしないように工夫する。	.85	
k26	家計簿をつけて、お金の出入りをチェックする。	.53	
		53.98%	
<b>不平等なお金のつかい方をする (α=.44)</b>			
k16	飲み会で、先輩におごってもらふ。	.78	
k5	飲み会で、後輩のみ分まで支払ふ。	.74	
k27	友だちなどに、「おごって」と言う。	.52	
		47.55%	
<b>平等なお金のつかい方をする (α=.60)</b>			
k6	みんなで飲み会をしたときの代金を、割勘にする。	.85	
k28	みんなで食事に行ったときの代金を、割勘にする。	.85	
k17	食事に行ったときに、各自、自分の食べた分は自分で支払ふ。	.49	
		56.03%	
<b>収入を得る (α=.63)</b>			
k29	アルバイトの日数を増やす。	.91	
k7	アルバイトをする。	.90	
k18	より自給の高いアルバイトを探す。	.39	
		59.40%	
<b>寄付的な行動をとる (α=.64)</b>			
k19	街で募金の箱を持った人を見かけて、寄付する。	.86	
k8	コンビニで、募金箱にお金を入れる。	.80	
k30	神社やお寺に行つて、お賽銭をあげる。	.63	
		59.43%	
<b>人に合わせる (α=.76)</b>			
k20	友だちと食事に行き、自分だけ食べた金額が高くなるのがいやで、デザートや飲みものを我慢する。	.89	
k9	友だちと一緒に食事に行き、値段の高いものが食べたいのを我慢して、友だちと同じくらい値段のものを頼む。	.87	
k31	友だちと出かけたとき、自分は安い店でいいと思ったが、友だちにケチだと思われるといやなので、友だちの言った少し高い店に行くことに決める。	.33	
		55.15%	
<b>お金を拾う (α=.78)</b>			
k10	道端に落ちていた小銭を拾つて、自分のものにする。	.90	
k21	自販機の釣り銭出口にお金が残っていたら、もらふ。	.84	
k32	落ちているお金に気づいても、ほうっておく。	-.75	
		69.23%	
<b>お金の話をする (α=.69)</b>			
k22	友だちに、貯金がどのくらいあるか聞く。	.82	
k33	友だちの持ち物の値段を尋ねる。	.77	
k11	友だちに、バイト代がいくらか尋ねる。	.77	
		61.87%	

注) 最終的に採用した項目については主成分負荷量を点線で囲った。

Table 3 各尺度の基本統計量

	n	項目数	平均値	標準偏差	α係数
<b>大学生用お金に対する信念尺度</b>					
ネガティブな影響源	198	6	3.24	0.77	.90
ポジティブな影響源	199	6	3.23	0.68	.77
労働の対価	199	6	3.95	0.75	.87
獲得困難性	198	6	4.25	0.70	.92
重要性	198	6	4.37	0.54	.84
<b>お金に関連する行動項目</b>					
貸す	199	3	2.70	0.67	.77
借りる	199	3	2.23	0.79	.77
統制できていない行動をとる	199	3	2.61	0.73	.63
統制している行動をとる	199	2	2.43	0.91	.76
平等なお金のつかい方をする	198	3	3.50	0.58	.60
収入を得る	199	3	2.72	0.83	.63
寄付的な行動をとる	199	3	2.19	0.67	.64
人に合わせる	199	2	3.16	0.67	.66
お金を拾う	199	3	2.41	0.88	.78
お金の話をする	199	3	2.01	0.73	.69

注) お金に関連する行動項目のα係数は最終的に採用した項目から算出したものである。

お金に関連する行動項目の10変数であった。分析には素点を用いた。2~5クラスターについて検討した結果、解釈可能性の高さから、4つのクラスターが採用された。各クラスターの特徴を、z得点に基づいてグラフにしたものがFigure 1である。

第1クラスターは、「借りる」、「統制できていない行動をとる」、「貸す」、「平等なお金のつかい方をする」、「収入を得る」、「寄付的な行動をとる」の得点が高く、他者との金銭のやりとりが活発なことが特徴であると考えられたため、「やりとり活発群」と命名した。第2クラスターは、「人に合わせる」、「統制している行動をとる」の得点が高く、「借りる」、「貸す」、「統制できていない行動をとる」の得点が低く、他者との金銭のやりとりが不活発であることが特徴的であったため、「やりとり抑制群」と命名した。第3クラスターは、「借りる」、「収入を得る」、「平等なお金のつかい方をする」、「お金を拾う」、「お金の話をする」、「人に合わせる」の得点が低く、全般的にお金に関する行動が少ないことが特徴的であったため、「全般的抑制群」と命名した。第4クラスターは、「お金を拾う」、「お金の話をする」の得点が高く、「人に合わせる」、「寄付的な

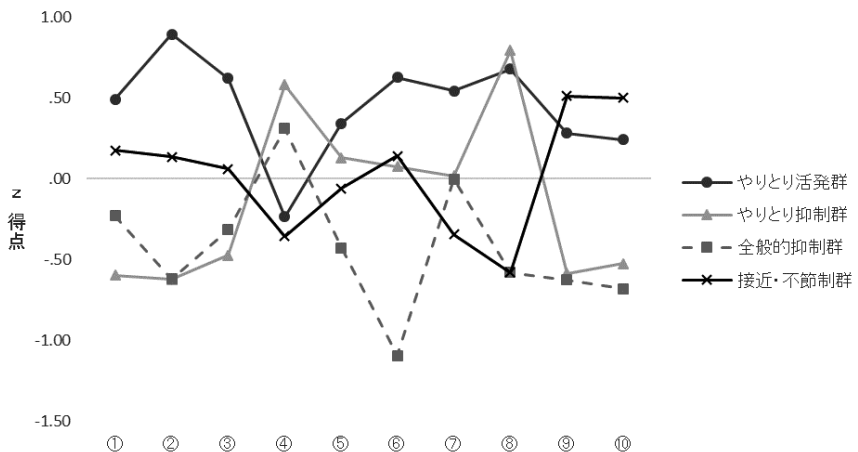


Figure 1 クラスターごとのお金に関連する行動の特徴 (z得点)

注) 丸数字は変数名。数字と行動の対応は次のとおりである。①貸す, ②借りる, ③統制できていない行動をとる, ④統制している行動をとる, ⑤平等なお金のつかい方をする, ⑥収入を得る, ⑦寄付的な行動をとる, ⑧人に合わせる, ⑨お金を拾う, ⑩お金の話をする。

行動をとる」,「統制している行動をとる」の得点が低く、お金の接近的であることと、お金に関する行動をコントロールするタイプの行動が少ないことが特徴的であったため、「接近・不節制群」と命名した。「やりとり活発群」は44名、「やりとり抑制群」は43名、「全般的抑制群」は37名、「接近・不節制群」は74名であり、「接近・不節制群」が最も人数が多かった。

4群の差を明らかにするため、投入変数およびお金に対する信念について一要因分散分析を行い、有意差が見られた変数に関しては多重比較 (Tukey法)を行った。結果をTable 4に示した。投入変数として用いたお金に関連する行動の10カテゴリーは、有意な差を示した(貸す;  $F(3,194)=11.69, p<.01$ : 借りる;  $F(3,194)=33.53, p<.01$ : 統制できていない行動をとる;  $F(3,194)=11.84, p<.01$ : 統制している行動をとる;  $F(3,194)=11.52, p<.01$ : 平等なお金のつかい方をする;  $F(3,194)=4.57, p<.01$ : 収入を得る;  $F(3,194)=30.48, p<.01$ : 寄付的な行動をとる;  $F(3,194)=8.06, p<.01$ : 人に合わせる;  $F(3,194)=48.41, p<.01$ : お金を拾う;  $F(3,194)=23.45, p<.01$ : お金の話をする;  $F(3,194)=21.29, p<.01$ )。一方、大学生用お金に対する信念尺度の得点では、各群で有意差が見られなかった。

クラスター分析では、他者とのお金のやりとりが活発な「やりとり活発群」、他者とのお金のやりとりが少ない「やりとり抑制群」、他者とのお金のやりと

Table 4 お金に関連する行動項目および大学生用お金に対する信念尺度の分散分析の結果

	1.やりとり活発群 (44)	2.やりとり抑制群 (43)	3.全般的抑制群 (37)	4.接近・不節制群 (74)	F値	多重比較 (Tukey法)
<b>お金に関連する行動項目(投入変数)</b>						
貸す	3.02(0.54)	2.29(0.57)	2.54(0.62)	2.81(0.68)	11.69**	2<1, 2<4, 3<1
借りる	2.93(0.55)	1.74(0.46)	1.74(0.71)	2.33(0.75)	33.53**	2<1, 2<4, 3<1, 3<4
統制できていない行動をとる	3.06(0.61)	2.26(0.66)	2.38(0.82)	2.65(0.64)	11.84**	2<1, 2<4, 3<1, 4<1
統制している行動をとる	3.00(0.57)	3.55(0.41)	3.36(0.55)	2.92(0.77)	11.52**	1<2, 1<3, 4<2, 4<3
平等なお金のつかい方をする	3.70(0.45)	3.57(0.59)	3.25(0.73)	3.46(0.50)	4.57*	3<1, 3<2
収入を得る	3.24(0.53)	2.78(0.81)	1.81(0.69)	2.84(0.70)	30.48**	2<1, 3<1, 3<2, 3<4, 4<1
寄付的な行動をとる	2.55(0.67)	2.20(0.66)	2.19(0.66)	1.96(0.59)	8.06*	2<1, 3<1, 4<1
人に合わせる	3.05(0.58)	3.15(0.74)	1.91(0.58)	1.91(0.77)	48.41**	3<1, 3<2, 4<1, 4<2
お金を拾う	2.66(0.75)	1.90(0.64)	1.86(0.75)	2.86(0.82)	23.45**	2<1, 2<4, 3<1, 3<4,
お金の話をする	2.19(0.71)	1.63(0.57)	1.51(0.50)	2.38(0.69)	21.92**	2<1, 2<4, 3<1, 3<4
<b>大学生用お金に対する信念尺度</b>						
ネガティブな影響源	3.28(0.60)	3.18(0.71)	3.16(0.87)	3.30(0.83)	0.40	
ポジティブな影響源	3.27(0.62)	3.09(0.61)	3.13(0.77)	3.35(0.71)	1.70	
労働の対価	3.86(0.81)	4.00(0.65)	3.99(0.57)	3.97(0.86)	0.32	
獲得困難性	4.25(0.66)	4.30(0.74)	4.36(0.54)	4.16(0.78)	0.75	
重要性	4.37(0.47)	4.39(0.54)	4.51(0.52)	4.28(0.59)	1.51	

注) クラスターの下の ( ) 内の数字はn。平均値の後ろの ( ) は標準偏差。\* $p<.05$  \*\*,  $p<.01$ 。

りだけでなく収入や捨うといった個人的なお金に関連する行動も少ない「全般的抑制群」、お金に対し接近的かつ自己制御がとれていない「接近・不節制群」の4群が抽出された。4群間においてお金に関連する行動に差が見られたが、お金に対する信念では差が見られなかった。

### 総合考察

本研究では、大学生のお金に関連する行動の分類および行動の類型化を目的として調査を行った。調査1では、面接調査の結果をもとにお金に関連する行動を分類した。調査2では分類に基づいて項目を作成して調査を行い、類型化を行った。

調査1において面接調査の結果を分類した結果、14のカテゴリーが生成された。カテゴリーは、「貸し借りをする」、「統制できていない行動をとる」、「統制している行動をとる」、「不平等なお金のつかい方をする」、「平等なお金のつかい方をする」、「収入を得る」、「寄付的な行動をとる」、「人に合わせる」、「お金を捨う」、「友だちとお金のつかい方が似ている」、「お金の話をする」、「交際費」、「買い物に一人で行く」、「その他」であった。このうち、「友だちとお金のつかい方が似ている」、「交際費」、「その他」は行動ではないと判断されたため、お金に関連する行動として11カテゴリーが得られたことになる。

これらの行動の中では、「貸し借りをする」、「不平等なお金のつかい方をする」、「平等なお金のつかい方をする」は、竹尾ら(2009)の子どもを対象とした調査において、類似の内容が調査項目に含まれていた。また、「寄付的な行動をとる」は渡辺(2014b)で扱われている募金行動に重なるものと考えられる。「お金の話をする」はPapp, Cummings, & Goeke-Morey(2009)で扱われているお金の話題と類似している。Papp, Cummings, & Goeke-Morey(2009)で扱われたのは夫婦間のお金の話題であったが、本研究からは大学生の友人関係においてもお金について話されることが確認された。「お金を捨う」はVitell, Paolillo, & Singh(2006)やVitell, Singh, & Paolillo(2007)で扱われた軽度の非倫理的行動(レジでおつりを多く受け取っても黙っておく、期限切れの割引券を使うなど)と部分的に重複する内容であると考えられる。加えて、家計機能に対応する行動も見られた。すなわち、「収入を得る」は家計の機能である「収

入」に、「買い物に一人で行く」は「支出」に対応するものと考えられる。

一方で、「統制できていない行動をとる」、「統制している行動をとる」、「人に合わせる」の3カテゴリーは本研究で初めて確認されたものであり、これまでの研究で扱われてきた概念や、家計の機能に適切に対応づけることが難しい。「統制できていない行動をとる」、「統制している行動をとる」は、その内容から、計画的なお金の使用に関する行動と考えられる。また、「人に合わせる」はより対人的な特徴を持つ行動であると考えられる。

調査2の結果から、大学生のお金に関連する行動は「やりとり活発群」、「やりとり抑制群」、「全般的抑制群」、「接近・不節制群」の4類型に集約可能であると考えられた。「やりとり活発群」は、他者との金銭のやりとりが活発であることが特徴であった。「やりとり抑制群」は、他者との金銭のやりとりが不活発であることが特徴であった。「全般的抑制群」は、全般的にお金に関連する行動が少ないことが特徴であった。「接近・不節制群」は、お金の接近的でありながら、お金をコントロールできていないことが特徴であった。

4類型の中で最も人数が多かったのは、「接近・不節制群」であった。「接近・不節制群」は、「お金を拾う」、「お金の話をする」など、お金の接近的でありながら、「人に合わせる」、「寄付的な行動をとる」、「統制している行動をとる」ことが少なく、お金をコントロールするタイプの行動が少ないという行動様式を示していた。このことから、大学生ではお金の接近的でありながらもお金をコントロールするタイプの行動が少ない者が多いと考えられる。大学生生活の中では、お金に関連した経験が増大するが、新規な状況に直面し、行動全体としてのバランスを取ることが難しいのかもしれない。

しかしながら、本研究では4群間にお金に対する信念尺度の得点差が見られなかった。行動の差が生じる理由として、お金に対する考え方の違いがあると想定した上での分析であったが、お金に対する信念に差がみられなかったことから、行動の差が生じる理由について、本研究から示唆を得ることはできなかった。加えて、調査2で行ったお金に関連する行動の測定は、少ない項目で各行動を測定しようと試みたために、信頼性が不十分な行動が生じ、一部、その後の分析に用いることができなかった。

本研究では、大学生のお金に関連した行動の特徴を明らかにしたが、すでに

Papp, Cummings, & Goeke-Morey(2009)でも明らかにされているように、お金は親密な対人関係に一定の影響力を持っている。青年期には他者と親密になることが心理社会的な面での課題の1つであるが、いずれ結婚した場合には家計の運営など、経済的な面においても親密な他者と協力して行動していく必要が生じる。そのための準備状態として、青年期にはどのようなスキルが身につけている必要があるのかなど、今後明らかにしていく必要がある。またその際、親密な対人関係におけるお金に関連する行動の影響過程の機序を明らかにしていくことも必要である。加えて、本研究で見いだされた4類型について、対人関係の適応上どのような違いがあるのかも検討していく必要がある。

## 付記

本論文は、筆者が2010年度に筑波大学大学院人間総合科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。また、本論文のデータは日本パーソナリティ心理学会第21回大会（2012年、島根県民会館）で発表されたうちの一部分である。

## 引用文献

- 有光興記 (2001). 罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係 性格心理学研究, 2, 71-86.
- Hanley, A. & Wilhelm, M. S. (1992). Compulsive buying: an exploration into self-esteem and money attitudes. *Journal of Economic Psychology*, 13, 5-18.
- 片平光昭 (2003). 第12章貨幣市場と利子率の関係を考えてみよう 長谷川啓之・太田辰幸・関谷喜三郎・片平光昭・安田武彦 (共著) 初心者のための経済学 創土社 pp.170-183.
- 金融広報中央委員会 (2016) . 子どものくらしとお金に関する調査 (第3回) 2015年度調査 <[https://www.shiruporuto.jp/public/data/survey/kodomo\\_chosa/2015/pdf/15kodomo.pdf](https://www.shiruporuto.jp/public/data/survey/kodomo_chosa/2015/pdf/15kodomo.pdf)> (2018年7月21日)
- 国立教育政策研究所 (2016). 平成26 (2014) 年度「大学生の学習状況に関する調査」基礎集計表 I. 大学昼間部 (設置者別・性別・学年別集計) <[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf06/kiso1a.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf06/kiso1a.pdf)> (2018年7

月21日)

- 国立青少年教育振興機構 (2016). 青少年の体験活動等に関する実態調査 (平成26年度調査) <[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/107/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/107/)> (2018年2月13日)
- 高坂康雅 (2009). 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と, 交際期間, 関係認知との関連 パーソナリティ研究, *17*, 144-156.
- 妙木浩之 (1999). 心理経済学のすすめ 新書館.
- 妙木浩之 (2000). こころと経済 産業図書.
- 成田健一・寺崎正治・新浜邦夫 (1990). 羞恥感情を引き起こす状況の構造——多変量解析を用いて—— 関西学院大学人文論究, *40*, 73-92.
- 日本学生支援機構 (2016). 平成26年度学生生活調査結果 <[https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei\\_chosa/\\_icsFiles/afiedfile/2017/06/16/data14\\_all.pdf](https://www.jasso.go.jp/about/statistics/gakusei_chosa/_icsFiles/afiedfile/2017/06/16/data14_all.pdf)> (2018年7月21日)
- Papp, L. M., Cummings, E. M., & Goeke-Morey, M. C. (2009). For Richer, for Poorer: Money as a Topic of Marital Conflict in the Home. *Family Relations*, *58*, 91-103.
- 最高裁判所事務総局 (2017). 司法統計年報 平成28年 3 家事編 法曹会.
- 竹尾和子・高橋登・山本登志哉・サトウタツヤ・片成男・呉宣児 (2009). お金の文化的媒介機能から捉えた親子関係の発達の変化 発達心理学研究, *20*, 406-418.
- Tang, T. L. P. & Chiu, R. K. (2003). Income, money ethic, pay satisfaction, commitment, and unethical behavior: Is the love of money the root of evil for Hong Kong employees? *Journal of Business Ethics*, *46*, 13-30.
- Tang, T. L. P., Sutarso, T., Davis, G. M. T. W., Dolinski, D., Ibrahim, A. H. S., & Wagner, S. L. (2008). To help or not to help? The good Samaritan effect and the love of money on helping behavior. *Journal of Business Ethics*, *82*, 865-887.
- 豊田弘司 (1998). 大学生における嫌われる男性及び女性の特徴 奈良教育大学教育研究所紀要, *34*, 121-127.
- 豊田弘司 (1999). 大学生における嫌われる特徴の分析 奈良教育大学教育研究



所紀要, 35, 71-75.

Vitell, S. J., Paolillo, J. G. P., & Singh, J. J. (2006). The role of money and religiosity in determining consumers' ethical beliefs. *Journal of Business Ethics, 64*, 117-124.

Vitell, S. J., Singh, J. J., & Paolillo, J. (2007). Consumers' ethical beliefs: The roles of money, religiosity and attitude toward business. *Journal of Business Ethics, 73*, 369-379.

Vohs, K. D. (2015). Money priming can change people's thoughts, feelings, motivations, and behaviors: An update on 10 years of experiments. *Journal of Experimental Psychology, 144*, e86-93.

渡辺伸子 (2014a). 大学生用お金に対する信念尺度の作成 応用心理学研究, 40, 11-22.

渡辺伸子 (2014b). 東日本大震災における大学生の募金行動とお金に対する信念および共感性, 援助規範意識の関連 応用心理学研究, 40, 71-81.

渡辺伸子・佐藤有耕 (2010). お金に対する態度に関する心理学的研究の動向 筑波大学心理学研究, 40, 61-71.

Yamauchi, K. T., & Templer, D. I. (1982). The Development of a Money Attitude Scale. *Journal of Personality Assessment, 46*, 522-528.